佛大共同研究プロジェクト

現代社会における〝宗教の力〟

公開講演会「僧侶による自死への取り組み」

佛教大学総合研究所（門田誠一所長＝京都市）が主催し、同大学内外の研究者と共通課題に取り組む共同研究プロジェクト「現代社会における宗教の力」の講演会が6月24日、京都市の佛教大学で行われた。このなか、国際宗教研究所研究員として自死・自殺問題に取り組む浄土宗僧侶・小川有閑師が「僧侶による自死への取り組み」の講題で、研究成果やこれまでの事例を発表した。

小川師はまず、「平成24年以降、自死者は3万人を割ったものの、依然として毎年約2万7千人以上の人が命を落としている。これは1日平均75人、時間にして19分に1人が亡くなる計算になる。また全体の約7割が男性である」と日本の自死者数の現状を示し、続いて自らも参加する「自死・自殺に向き合う僧侶の会」の活動を紹介した。

とくに手紙を通じ僧侶に悩みを相談する「自死の問い・お坊さんとの往復書簡」の事例を取り上げ、「相談者自身が手紙を書くことで自分の心の中を整理し、何度も読み返すことができる。また受け取る側は、文字から相談者の精神状態を読み取り、慎重に回答することができる。なにより、直筆による温もりが伝わる」と電話や対面相談とは違ったメリットをあげた。また、開始後6年間で5780通、1009名から相談が寄せられ、そのうち男性が138名と、圧倒的に少ないことをあげ、「これは、男性は普段手紙を書くことが少ないからではないか」と指摘。さらに、相談を寄せた男性のほとんどが独身であることから「郵便物を受け取るのは多くの場合が妻であり、夫は手紙を書きにくいことが背景にあるのでは」とし、男性が悩みを打ち明けにくい環境や性質が、結果として男性の自死が多いことにつながるのではないかと考察するとともに、他者に相談することの必要性を主張した。

講演後、参加者からは「同じ僧侶としてどう相談にのればいいのか」「尊厳死についてどう思うか」など活発な質疑が交わされた。ここでの成果は今後共同プロジェクトに反映される。

自死への取り組みについて熱く語る小川師

奈良

秘仏「板仏」年に一度の開扉法要

恵心僧都ゆかりの地で

奈良県香芝市の福應寺（寺内俊雄住職）で7月9日、同市の文化財に指定されている本尊の秘仏「板仏」の、年に一度の開扉法要が営まれた。

板仏は正式には「板地紙貼彩色阿弥陀三尊来迎図」といい、2枚の檜板に貼り接いだ薄紙に、阿弥陀三尊（阿弥陀仏・観音菩薩・勢至菩薩）が、念仏者を迎えにくる様が描かれたもので、畳約一畳分の大きさ。

同市は『往生要集』などを著して浄土信仰・念仏信仰を広め、法然上人の思想形成にも影響を与えた平安時代の僧恵心僧都源信（942－1017）の生誕地で、幼少の僧都が旅の僧侶に出会い、出家を勧められた阿弥陀橋をはじめ、僧都ゆかりの足跡が数多く残っている。同寺はその僧都の創建とされ、板仏も僧都による真筆との伝承がある。

住職を導師に午後2時から開扉法要が勤められ、法要後も午後8時まで参拝者が訪れた。寺に続く沿道には露店も立ち並び、夕方から夜にかけては、檀信徒のみならず近隣の人々や浴衣姿の子どもたちも多く訪れ、珍しい仏画に合掌礼拝し、結縁していた。

写真提供：香芝市二上山博物館

早期英語教育は必要？

保育協会地区研修会で僧侶・識者が議論

文部科学省が平成32年からの実施を目指し準備を進める小学校3年生からの英語教育。これを受け、6月21日に長野市の大本山善光寺大本願を会場に開かれた浄土宗保育協会の関東地区研修会の中で、「子どもに英語教育は必要か？」と題したパネルディスカッションが行われた。同協会は浄土宗寺院などが運営する幼稚園・保育園の関係者で組織され、研修会には僧侶、保育士など約140名が参加した。

初日から教育専門家らの講義を受け、シンポジウムは小学校で始まる英語教育に対し、幼児教育はどう対応するかとの視点で開かれた。大本願鷹司誓榮副住職、東海学園大学袖山榮眞学長（長野市十念寺住職）、立教大学鳥飼玖美子特任教授、東京外国語大学水野善文教授の各氏が登壇し、同市パドマ幼稚園園長で蓮心寺住職の金子英滋師をコーディネーターに議論が交わされた（写真）。

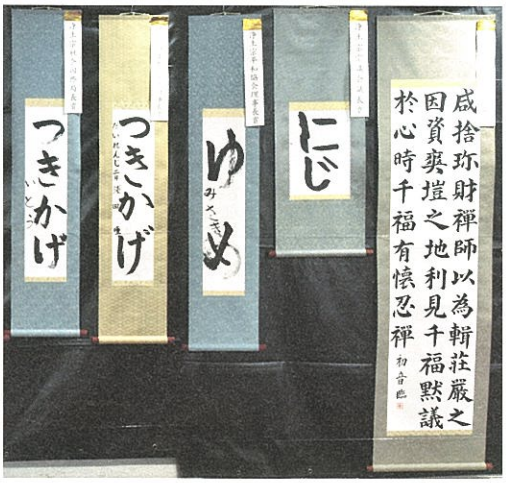
鳥飼氏は「家庭、国からの要望のはざまで、公教育としては非常に難しい部分がある」とし、「早期教育が良いという根拠も不十分」と提言。また水野氏は小学校で教えるローマ字教育との発音の整合性について触れ、「国語教育との総合的連携が必要」とした。袖山師は宗門学校などで歌われる宗歌「月かげ」をあげ「子どもの頃に分からなくとも、大人になってその意味を理解することもある。種まきという意味では早期教育にも意義はあるのでは」とした。また鷹司師は、大本願で行うガールスカウト活動のなかで積極的に海外に向かう子どもたちを例にあげ、「学力としての英語ではなく、異文化への開かれた心をはぐくむコミュニケーション手段としての実体験が重要」とした。

質疑応答では英語教育を始めているという保育関係者から「違う言語、文化、人種の存在を分かってもらうために、まずは外国人と遊ぶことから始めています。教育からでは抵抗感があるのでは」との意見があった。

青少年奉納書道展　金賞・特別賞紹介③

幼児から高校生までを対象とした「第33回全国青少年奉納書道展」（浄土宗児童教化連盟主催）が3月に大本山善導寺、4月に大本山増上寺・総本山知恩院の各会場で開催されました。金賞・特別賞の作品を紹介しています（最終回）。

作品右から、浄土宗宗務総長賞（木下初音・中1）、浄土宗宗議会議長賞（浦野瑞也・5歳）、浄土宗平和協会理事長賞（坂本光咲・保育園）、浄土宗児童教化連盟理事長賞（浅田瞳・幼稚園）、浄土宗社会国際局長賞（伊藤怜・保育園）。（敬称略。学年などは昨年度時点。順番は増上寺展示順）



無意識に日本文化を呼吸している私たち。
その背景には〝日本の仏教〟があった。
『日本仏教思想のあゆみ』
竹村牧男 著　四六判　三六〇頁
定価2,160円（税込）
ISBN978-4-88363-059-2 C0015
浄土宗出版
［浄土宗文化局出版担当］
お申し込みは浄土宗出版
電話　03－3436－3700
FAX　03－5472－4878
ホームページ（浄土宗出版）もご覧下さい。